

農家用字篇  
 手習行義掟書  
 芭蕉翁癸句集

全

進藤氏





農家日用之書

支百姓日用之書其書極又  
中子名別以傳入唐書氏志  
懷沙年百有年之納押切收  
油通之書曰知定皆滿日能  
知日記是之志之極究也極分  
其之平之百之極在唐書氏志  
田高八百之極在唐書氏志  
七倉五家五指七所之及解  
田况氏信和之書之上下





田新田相用及之取加添切  
手捨地号入邊附沙伏在次  
高下有之相之云云之推定  
身并之合七方多互別  
之在七町方互之町下邊及  
沙代産産補上之相互之  
添唐堂細為成之加相生  
花甲乙有之武之互換昇  
損方層之添門側之免  
と推別之是地之互之年規が

物成後何分何所増減之  
と推之互之毎〇〇之毛合  
目之令之之丙年之之之  
之早之魁之早指之之村  
荒土大沖之痛損之毛  
俾之内之目様之合推入  
之加推之相及之合之之  
目之及指之之方之之先  
相之及之之之之之之相  
成之之之之之之之之



永正式近代堀代及代  
遠司等也。古者爰又  
畑田數は年々増出月了  
納く尤玉姓は時々我輩  
波物も亦古儀に似る相  
増世極可なり。是中一は肥淋  
田等あり。他は少く動  
農除地也。保熟田種子  
古村より記す。古書に中より  
粒約りの清日。如書り。行に

大和合苗代極之産業時  
香畑際中一極也。人肉  
或は粟や子に。到苗迄は  
極の。以極早に。穀も多  
大概は。好之穀也。極亦之  
也。仙卷。早稲。中稲。晚稲  
穀。糯。葉。歸。能。歸。之。也。在。解  
白。陽。也。也。田。方。村。淋。入。樽。也  
一。五。畝。一。五。畝。記。書。其。肥。也  
刈。草。子。株。生。介。粉。糠。油。糟  
耐。焼。拍。了。稻。古。及。之。隨。其。氏



一曰之 仗極焉 羊取焉 狀  
打也 個之 苗也 里乙 女田 種  
也 江有 法首 改種 也 之 栽  
法 之 出 法 田 也 以 之 或 之  
苗 植 也 乃 之 知 日 之 入 田  
也 弄 了 變 亦 一 糧 之 亦 粟  
黍 稷 未 仕 付 之 之 亦 紀 也  
油 大 豆 之 亦 是 既 是 大 自 是  
芝 蔴 也 子 芝 蔴 也 麥 菜 大  
根 芝 蔴 房 耳 凡 白 凡 胡 凡  
芋 之 類 等 戶 戶 池 也 麥 菜

穀 書 也 穀 菽 子 之 亦 也 亦 菜  
穀 菽 也 之 穀 菽 菽 也 亦 菜  
海 唐 之 菽 菽 亦 行 稻 法 山 葵  
菽 菽 菽 菽 菽 菽 菽 菽 菽  
菽 菽 菽 菽 菽 菽 菽 菽  
子 菽 菽 菽 菽 菽 菽 菽 菽  
也 也 也 也 也 也 也 也 也  
也 也 也 也 也 也 也 也 也  
也 也 也 也 也 也 也 也 也  
也 也 也 也 也 也 也 也 也  
也 也 也 也 也 也 也 也 也  
也 也 也 也 也 也 也 也 也



自感絕無餘券了清等望  
謂之草則相入後分出情  
若對大皇赫後字中發  
蓄友則蔽到字介胡解  
此字此舞 法字此楷仗  
時上陶之記書排

枯收岩今日幼之成以福  
則必回再何事之把對據  
西元此字之入字之字  
子方氣而後之時之田場

此等商 稻穗極多極  
截隔字了底之據據其以  
附於穗之極心希字極  
下自乞字之費信之道  
也 蓄者意也中極以集為  
積西收之期也活養以  
去度及生也月之極其相  
信才一善是後之把板  
穡師 中朱 兼水室  
從遠入云極至也為也



粗像花入沙年首夏  
金瓶之素末之末記  
少亦以探物糖粉糖  
除物分糖之根中  
儀而儀中入行儀上兩  
除身之料  
角至少作之化性何  
百儀唐納之田製  
重肌糖之用行  
也 二部之金身之料

金儀花用沙年首夏  
金瓶之素末之末記  
少亦以探物糖粉糖  
除物分糖之根中  
儀而儀中入行儀上兩  
除身之料  
角至少作之化性何  
百儀唐納之田製  
重肌糖之用行  
也 二部之金身之料



入會相教之曰佛心  
可之耕之此海從極極之  
有言在教曰之每如願  
利之或之肉已之行修  
善惡消之妨無之極可  
之或之房之之除石堤  
孔枕欄地者所門儀  
或之梓入押田彼之  
之極之流之可之若信  
則一修者海思之也

亦以之或之亦行需也  
則卓首自其年之之何新  
極之月之河年方之清下出河  
岸陽儀儀法送其之  
之極之之或之之河傳馬  
大也之也送村加地改同  
之人馬到地物其高者傳  
之也之之河用之之之也  
可之也之皆月自也



以林也宜之七介少假  
其氏有之而之素楮  
之其有在之其草  
按如梅楸栗板楸  
類楸之類也其  
何徑言之其楸  
松楸之類也其  
則附之其楸  
海牛——新田等

類楸之類也其楸  
相門楸相代楸  
生於山中之楸  
本其之其仁也其楸  
其有在之其草  
其有在之其草  
其有在之其草  
其有在之其草  
其有在之其草  
其有在之其草



面刻ははか入申支度  
事序一出之平生者後  
定之私書書美事平了貴定  
之ハ私心能く時  
貴紀若事次第とす掃除  
方願申す一箇口時  
言々但之能く書信  
目以方仁義禮智信  
事者以事事の事申す

重 朝臣候と信他人

教こと事の内親と考  
之復事の内親と考  
下女奴隷事と考  
事役事と考  
事ハ私心能く時  
事ハ私心能く時  
事ハ私心能く時  
事ハ私心能く時  
事ハ私心能く時  
事ハ私心能く時  
事ハ私心能く時  
事ハ私心能く時



此修家法一対して  
永く由妙なるもの也

その家法は妙なるもの也

自習

上るべき事

あつげぬものなり

善なること

ことなり

臣

手習行義校書

一昨の家法は、其の對して、  
軍勇をわくつゝは、我々  
相し、動火のつゝは、  
あるは、  
津に、  
亦、  
又、  
一、  
改、



仁義公好し尤聖なるを  
目しとて徳といふ大徳は高  
聲し杆柄は流しは流し遣  
いふと等しと雖も作山成  
之徳は仁方交りあり  
厚く仁を用人もむり  
ありとて徳は道なる徳は  
徳徳と徳徳と徳徳と  
りこつとて事

一侍は侍のあり侍のあり

久遠の女は女は女は  
若くは女は女は女は  
人の女は女は女は

一豆は豆のあり豆のあり  
豆は豆のあり豆のあり  
豆は豆のあり豆のあり  
豆は豆のあり豆のあり  
豆は豆のあり豆のあり

一戸は戸のあり戸のあり  
戸は戸のあり戸のあり  
戸は戸のあり戸のあり  
戸は戸のあり戸のあり  
戸は戸のあり戸のあり



我らうらひの者さるりのま  
物苦しいゆゑのけい念罪  
人の境果たせしめるべき事  
一 讀む能く書けしむる者其種不  
制式唯我にの族は行  
其く少内西軍  
侍真其けは初初其若以捕  
位せしむる或は嘲く後ら  
の如和振分其代に後をり  
若者其命合ひ其責つて  
及至悔はし不悔其罪

一 罪とて行 眞の罪とて  
仲間の特後足其等百遠  
其く悔法若ら以遠其  
早能其より其  
一 嘘に著者悪心罪は其暗茶  
其く死して弱く其の所  
己故とて其を觀之れ机  
又庫前脊可し其  
持傷よら其方其は其  
し其く其く捕獲  
信とて其



一 其の事解成を反致の事  
けよ少くも誓ひて或る教  
を誓ひて自異と信し  
居候こと

一 机は徳中浮成庵とて善  
相翻りてお汁傳し  
枯之とて抹きおし  
候し候は家天鬼就能  
氣取との作つ古慎了  
りし

一 白と申は常刺を西月  
嚙カミ嚙コナシみことらのよコライ砂洲で

一 昔おとらうて作の事も大醫  
誓は言道那行見少法  
ころ

一 我ら心の苦を以て  
欺情し行陰に連立  
空懸りて他をせし事  
ふ殊傳付行真少法  
一 忠智恵は後門智報  
荒れれば根を林際お  
岡其より好武の本登り  
又一人て樹し用は代



教と學の光は燈の如し  
又傳はた有る有る氣度及親之  
いこの道は長

言傳ふは如く言ふ道車

紙書心書よりの心會書也

一傳書は心よりの心會書也

帝よりの陰行の陰行

魂消るを心行して大體

一和業の心法也

右の書は帝の心行也人

用く無心行して心行に事

在る也一傳書は心行と相會

一白學問の心行也

一と心行宗階級は心行

心行の心行は心行也

一と心行親の心行は心行

一と心行の心行は心行

一と心行の心行は心行

一と心行の心行は心行

一と心行の心行は心行

一と心行の心行は心行

一と心行の心行は心行



價と古人の義解を以てし  
得ずの智後中一れは徳心  
學より又いふ常一を稱し根  
し〜もよらう思ふことし徳  
に後〜終りたり馬より南  
し養育ありといふ也増し人  
りしは善く〜流し心  
疾〜母學の心も名にも善の  
道よりあり〜の徳を〜  
あり止の方徳を〜の徳と爲し  
考ふる所名仁を〜生徳〜  
恥辱なり〜教と徳と徳と徳と  
〜名は徳徳と徳と徳と徳と  
信親と孝と仁と教と明と  
親家也〜流徳を〜の  
徳也徳〜合別〜  
云道〜山程は徳の徳行  
〜擁護あり〜終り而  
生徳也徳と名も徳も徳  
流し是れ徳也



二  
石  
林  
好  
書  
何  
得

莊  
友  
海  
印

尚  
春  
文  
一





芭蕉翁癸句集

春之部

庭前の佳菜 籠文庫よりとねのま  
兼ふれふらとせいのねもさ  
まをちや新子ぬゆよ第五升

ふれよのふれよ

籠智くま 薫るおは 備わたり 今年  
為宮の侍り 宵月 神代神 ちり  
籠や ちりちり ちりちり ちりちり

音の幸 ちりちり ちりちり ちりちり  
お年 ちりちり ちりちり ちりちり  
ちりちり ちりちり

二日 ちりちり ちりちり ちりちり

ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり

元日 ちりちり ちりちり ちりちり



都よりうよ西の事なりし

藤とをを旅人なりし事のみを

御記の事ありては御記にありし

ころは分りて御記にありし

大津西の事なりし御記にありし

らむ様より看せし御記にありし

人もてぬまや陸奥より往く御記にありし

道にまたぬまや伊勢の御記にありし

この日にて都より往く御記にありし

古知や御記にありし男にありし

よと見えに御記にありし御記にありし

首に御記にありし御記にありし

つと御記にありし御記にありし

うら御記にありし御記にありし

若も御記にありし御記にありし

この御記にありし御記にありし

御記にありし御記にありし

御記にありし御記にありし

御記にありし御記にありし

御記にありし御記にありし

御記にありし御記にありし

御記にありし御記にありし

御記にありし御記にありし

御記にありし御記にありし

御記にありし

御記にありし御記にありし

御記にありし御記にありし

御記にありし御記にありし

御記にありし御記にありし



香のよのほしくのほのほの園のうめのま  
心人の集ちちのまのまのまのまのまのま  
たまかたけし

わささるわささるのちもあのみ  
伊勢のあけのゆは、物一本も  
まのこよ良飯のほよ一本

河子の良の子一もを席しあこりあうけのま  
細代政部の自あよあきて

梅のちよけやとうちやう地のま  
園めうまか

暖簾よあもは田うー北の梅  
山更をて万葉おろしー梅のま

阜袋亭月待

月待や梅うとけり小山伏  
里の子ふ梅おのこせ牛の集

まもや、希ーあーこのあ白心梅

まもや、希ーあーこのあ白心梅  
まもや、希ーあーこのあ白心梅

梅の香よのけし日はある山原

何是朝のま年二月まのまのまのま  
一園あけのまのま梅九子のう

のまのまのま

梅のまよむのーのーまのまあ

うけのまのまのまのまのまのまのま  
あ梅やとねあつくるまのま

て好らば戸あけむし

梅のまのまのまのまのまのまのま

梅のまのまのまのまのまのまのま

あそくまのまのまのまのまのま

うらひすけ魂はあつるまのまのま



まじりぬのよはつる柳のまゝあゝの南  
八九百のまをこ内なるやまのまのれ  
合衆と押し口けつるの柳の南  
まゝあゝのまのまのまのまのまのまの  
まゝあゝのまのまのまのまのまのまの

尾利紅蓮寺の記

まゝあゝのまのまのまのまのまのまの  
まゝあゝのまのまのまのまのまのまの  
まゝあゝのまのまのまのまのまのまの  
まゝあゝのまのまのまのまのまのまの  
まゝあゝのまのまのまのまのまのまの  
まゝあゝのまのまのまのまのまのまの  
まゝあゝのまのまのまのまのまのまの  
まゝあゝのまのまのまのまのまのまの  
まゝあゝのまのまのまのまのまのまの  
まゝあゝのまのまのまのまのまのまの

枯せややくく陽炎の一二寸  
かけらふの柳屑のころろのまのまの  
陽炎やまのまのまのまのまのまの

熊前入りり人よ

柳のまのまのまのまのまのまの  
柳のまのまのまのまのまのまの  
柳のまのまのまのまのまのまの  
柳のまのまのまのまのまのまの  
柳のまのまのまのまのまのまの  
柳のまのまのまのまのまのまの  
柳のまのまのまのまのまのまの  
柳のまのまのまのまのまのまの  
柳のまのまのまのまのまのまの  
柳のまのまのまのまのまのまの

あけり

船の子は白魚のまのまのまのまのまの  
船の子は白魚のまのまのまのまのまの  
船の子は白魚のまのまのまのまのまの  
船の子は白魚のまのまのまのまのまの  
船の子は白魚のまのまのまのまのまの  
船の子は白魚のまのまのまのまのまの  
船の子は白魚のまのまのまのまのまの  
船の子は白魚のまのまのまのまのまの  
船の子は白魚のまのまのまのまのまの  
船の子は白魚のまのまのまのまのまの

観子画題

老傭

まゝあゝのまのまのまのまのまのまの  
まゝあゝのまのまのまのまのまのまの  
まゝあゝのまのまのまのまのまのまの  
まゝあゝのまのまのまのまのまのまの  
まゝあゝのまのまのまのまのまのまの  
まゝあゝのまのまのまのまのまのまの  
まゝあゝのまのまのまのまのまのまの  
まゝあゝのまのまのまのまのまのまの  
まゝあゝのまのまのまのまのまのまの  
まゝあゝのまのまのまのまのまのまの

千里の伴よ



海苔汁の多味定せらるる清き椀  
おしろうくもあまらひあぢいめつのは  
二方きまよしもるを

ふらうやこしりまの徳の**当**のきる  
是橋の刺髪と髪同よ入ぬき  
とら午は旅の刺一匹の南

伊勢のき

神代やゆのひもあけけい湍般も像  
卯あらしをみらしそ雪の目所  
まごひ信置れ信を忠一じこ句  
躬まをさやこまきさよよはあらし  
何の本のりやしもあらし白のひ

若子繪巻

角土は湖流とくむる相襟  
襟のこれとくう堂中のり新の年

起りて我をよせんぬは相襟

乍其意

襟の羽の幾度い申う襟のたね  
古池や蛙とひらきあめあめ  
水よりも轉るるあまき  
原中やあまらうに端もとる  
雲を借よりよめあらし  
さるる

あめあまらうまき  
維子の影の  
ひらう中のおもや維子の影の  
靴くまもあまらう  
およはれおら  
煤なるを換うかあまらう  
雀のあまらう  
田をぬよあらし



若くは子やつて急を猫のつる  
猫の急やむ時園のたほろ月  
湖の眺を

辛崎のねをそとより眺むる  
ちの言はそ故なまふる

二股よりうづゆるゆらるる角  
うらひすの望をゆららるる橋  
とぬさゆにふこほららるる橋

杵折の懸負ちまき

け櫃のむら—橋の梅の赤れ  
うらゆるゆらゆらゆら—草子  
とぬらるる懸—とぬらるる  
高佛とる急を橋のさくら

若くは山

山さお山—は若くは山さお山

二巻新

若くは山さお山さお山さお山

請氏尚舎有橋の人よは

物の名成先とては若くは山さお山

若くは山の画題

若くは山の画題—若くは山の画題  
若くは山の画題—若くは山の画題  
若くは山の画題—若くは山の画題

若くは山の画題—若くは山の画題

若くは山の画題—若くは山の画題

若くは山の画題—若くは山の画題

若くは山の画題—若くは山の画題

若くは山の画題—若くは山の画題

若くは山の画題—若くは山の画題

若くは山の画題—若くは山の画題



見つゝ一餅了と喰ぬ柳のま  
咲み<sup>柳の</sup>伊勢と望ま<sup>柳の</sup>伊勢と望ま

伊勢と望ま<sup>柳の</sup>伊勢と望ま

大なる七重七葉の如き花を

西の傳は

草履の履かてゆく人

あはれを<sup>心</sup>を<sup>心</sup>を<sup>心</sup>を<sup>心</sup>

あはれを<sup>心</sup>を<sup>心</sup>を<sup>心</sup>を<sup>心</sup>

今ぬらや<sup>は</sup>は<sup>は</sup>は<sup>は</sup>は<sup>は</sup>

山さく<sup>は</sup>は<sup>は</sup>は<sup>は</sup>は<sup>は</sup>

探りての<sup>花</sup>別<sup>花</sup>別<sup>花</sup>別<sup>花</sup>別<sup>花</sup>

さあ<sup>は</sup>は<sup>は</sup>は<sup>は</sup>は<sup>は</sup>

花の<sup>心</sup>を<sup>心</sup>を<sup>心</sup>を<sup>心</sup>

芳野<sup>は</sup>は<sup>は</sup>は<sup>は</sup>は<sup>は</sup>

櫻<sup>は</sup>は<sup>は</sup>は<sup>は</sup>は<sup>は</sup>

山さく

鶴の<sup>花</sup>は<sup>花</sup>は<sup>花</sup>は<sup>花</sup>

船<sup>は</sup>は<sup>は</sup>は<sup>は</sup>は<sup>は</sup>

花の<sup>心</sup>を<sup>心</sup>を<sup>心</sup>を<sup>心</sup>

万平別

さあ<sup>は</sup>は<sup>は</sup>は<sup>は</sup>は<sup>は</sup>

句<sup>の</sup>心<sup>を</sup>

う<sup>は</sup>は<sup>は</sup>は<sup>は</sup>は<sup>は</sup>

阿<sup>は</sup>は<sup>は</sup>は<sup>は</sup>は<sup>は</sup>

愛<sup>の</sup>心<sup>を</sup>

花<sup>の</sup>心<sup>を</sup>

花<sup>の</sup>心<sup>を</sup>



世よこつりふも今佛やーくも  
茅相よき足新やうの傳の事ー  
観るるの西尾<sup>イナ</sup>とや里川<sup>イナ</sup>とれらるも  
若くして七日鶴<sup>イナ</sup>なる神康<sup>イナ</sup>のつも

物皆自得

まよあまこつたふくひをなま  
鶴<sup>イナ</sup>の事もあまこつたふくひをなま

草庵

草庵のちを陸<sup>イナ</sup>とて留り<sup>イナ</sup>はらふ  
あまの<sup>イナ</sup>信<sup>イナ</sup>本<sup>イナ</sup>とくや谷<sup>イナ</sup>の老<sup>イナ</sup>本<sup>イナ</sup>とく  
る事ーあまきあまきとあまき  
あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>  
あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>  
あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>

あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>

あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>

あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>

旅をける日

あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>

龍州

あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>

芳野

あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>

その尾村

あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>

あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>

あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>

あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>あまの<sup>イナ</sup>



のみうゝとちりゝと人の口伝  
わく世よひはむいはれと

頼みうゝとちりゝと人の口伝  
二つの園とぬい伝と

うたりあれ湖のまも浦のまも  
路まもまも

舟宿のわらゝとも折人雨のまも

伊勢のまも夜伝のまもまも  
南部のまも極の料と極

頼りるといひ伝と

一室のまもこれとまもまも

藤堂極のまもまも

おののまもやまもまも

祐碩の西極堂の祀と

四角よりまもまもまも

尾張の人よまもまも

頼りまもまもまも

深川のまもまもまも

南山のりまもまも

丑今のまもまも

ちるまもまもまも

傳専のまもまも

鶴のまもまもまも

西極のまもまも

西りのまもまもまも

玄虎子深川のまもまも

夜伝のまもまもまも

極をまもまもまも

かまぬまもまも

むよかまぬこれとまも



とせうに花見より帰るる人々  
暮春うちささき物もあるわうこの勢  
さ面なる侍の行列をたのみき

支考り東行 満月の

このまゝに推せしるふと黒一具  
端幅も出せしき世のまゝのわら

路通 三つあつた時

あは候とや一人のまをともね  
まの体いとく龍店は腰さげさ

躑躅生々その影は千鶴さく女  
丹波市とうやみあふらう口の春

かゝりくげ

あまのまをわらうはやう鶴力をくれ

山吹のまが葉のむのめいしら白のま

西行のま

ほろり〜から山吹たるる舞乃たる

山吹やまきよさるる屋よ花の恥

一思 羅

山吹やうらなほの燈行のにはほの時  
程早やとまのさかうとまぢあふら

白田うらやとまをさあうの候麻  
こ海うある二内や二まのまひのこ

和歌のま

まのまや 花のまをさあう〜まの湯  
隣接ぬ里をさ何さうまぢくれ

あまのま

りまよまぢあは浦より長月さう  
あまのまをさあうの胸よさうさ

りまや ちのまのまをさあう



聖湖の惜事

りまともあまみの人と押さるるは

夏の部

夕月のまを子仰つて旅の弟と

夏衣のやうな蛇をとるはくさけ

龍の

可脱るうーろは押ひぬらも呪

ほるとよに四月を梅は若さかやと

清く波の母は耳は香煙を子親

柱半一をきし飛さるそち

沙魚をひし魚介網してま初

のまよはしちうらうと鳥の花をちて

つうこちあふとみまをちとちとち

はまのまをちとちとち古戦場の名残

をちとちとちとちとちとちとち

罪障く移むうーとちとちとち

酒磨のほまはま先りの信やうる



雨より後この高角とては  
在り

後高角やたうこれ高角は  
館代より馬をゆくは口の男  
をんさくゆきをよこしや  
ゆきをよこし

雪を後馬車しげく野  
不卜一周忌琴風初進

杜鵑鳴や 少の記  
京もも京ももや蜀 魂

差峯

子親大牛一系をり月  
時多鳴や 立尺れり  
亦ら終るもつとも  
舊職を賞は

ゆきよはゆきよは  
つあふきよは  
子親の横とや  
ゆきのや  
ゆきのや  
ゆきのや  
ゆきのや

ゆきのや

ゆきのや  
ゆきのや  
ゆきのや  
ゆきのや  
ゆきのや  
ゆきのや  
ゆきのや  
ゆきのや

ゆきのや

ゆきのや  
ゆきのや  
ゆきのや  
ゆきのや  
ゆきのや  
ゆきのや  
ゆきのや  
ゆきのや



廿二日角う母也七日迄る

卯のさあも母よりよめぬいふは  
卯のさあやういよ梅のめい  
杜々

杜々あわさるあぬ向のめいひあを  
土飯うさし或人の伴うさ

あつるさあめいさも縁のめいさう

山崎 多智徳屋あつる近衛殿の  
多智徳屋あつるいさあつる  
梅のりうさうを地い出たあつるの  
うらうらう

あつるさうあつるあつるさうあつるさう

いさあつるさうあつるさう杜々

あつるさうあつるさうあつるさう

贈杜園子

ふあ子に相りく蝶のあつるさう

漁人のあつるさうあつるさうの  
さうさうさうさう

あつるさうあつるさうあつるさう

あつるさうあつるさうあつるさう

伊豆の玉野うさあつるさうあつるさう

あつるさうあつるさうあつるさう

あつるさうあつるさうあつるさう

あつるさうあつるさうあつるさう

甲斐のさうあつるさうあつるさう

あつるさうあつるさうあつるさう

あつるさうあつるさうあつるさう

あつるさうあつるさうあつるさう

あつるさうあつるさうあつるさう



句とよきものなり

者の徳にたよるよつらむの終り  
二度及桐葉ふる片のありさるる  
ちと下らんことなるに

牡丹菫帯ぬくもあつたのあはれ  
贈桃隣新宅自画自賛

きめぬあや牡丹のさるる  
招提寺をも體真なるの所  
とぬくゆ目の音とせり  
まゝなりて御目のあぬくことや  
口とよき

あつたつとまゝさるるのさるる  
須磨の園こそこの時

さつたつとまゝさるる  
雲の片は身は佛に  
雲の片は身は佛に

石のりとおる

本家も菫帯もやぶつた  
石のりとおる  
あつたつとまゝさるる  
あつたつとまゝさるる  
あつたつとまゝさるる  
あつたつとまゝさるる  
あつたつとまゝさるる

甲斐の山

山様の山とて  
あつたつとまゝさるる

山頂の山とて  
あつたつとまゝさるる

世のあり様はあつたつとまゝさるる



画賛

馬ほり〜 秋を待たぬる夏空を

落借のゆ〜 ねむきまををじ

ちかきま〜 ちかきまを

りりゆ〜 人よはなを〜 ちかきまを

秋有る〜 人よはなを〜 ちかきまを

穀生る石を

石のまや〜 ちかきまを〜 ちかきまを

高館

夏空や〜 秋もも〜 ちかきまを

竹の子や〜 秋もも〜 ちかきまを

ちかきまを

ちかきま〜 やちかきまを〜 ちかきまを

ちかきま〜 ちかきまを〜 ちかきまを

ちかきま〜 ちかきまを〜 ちかきまを

能より〜 の秋もも〜 ちかきまを

ちかきま〜 の秋もも〜 ちかきまを

ちかきま〜 の秋もも〜 ちかきまを

ちかきま〜 の秋もも〜 ちかきまを

ちかきま〜 の秋もも〜 ちかきまを

ちかきま〜 の秋もも〜 ちかきまを

ちかきまを

ちかきま〜 の秋もも〜 ちかきまを

ちかきま〜 の秋もも〜 ちかきまを

借まよ〜 ちかきまを〜 ちかきまを

ちかきまを

ちかきま〜 の秋もも〜 ちかきまを

ちかきまを

ちかきまを

ちかきま〜 の秋もも〜 ちかきまを



仙履又入るあやめゆ日や雪三葉  
はつしつと着けり舟の深路行たる  
子鞋と清に

あやめ子足まじき人あま鞋の結  
指ゆり片汗くまにまじいおのむ友

病中自叙

髪をくく常服着る一月二雨  
さこたまよかく寝ぬのや床田の橋  
の義柳を寄もらぬ月夜を待  
あつく方つれぬ金ちかしく脚や  
とまきやいつと昔月結ぬうらま  
を産む七宝うらうせを降の  
彫孔の形と合のほねるまはつを  
昔月あつ活のうらまやえを産  
こみたことをあつめうらまうらま

日のたや夢のうらまうらま  
あま掃をうらま

昔月あやも命屋をうらまの結  
と月あやをうらまうらまのうらま  
雨は清うらま

と月あやのうらまはるまをうらま  
大井川のあやをうらま  
あ月あやのうらまをうらま  
昔三十日の不三のうらま

目よあつあやうらま  
後河原やうらま  
眉掃をうらま  
つらうらまのうらま  
とんうらまと柳やうらま  
葉門に自叙うらま



やとよせん葉は枝はたりの日やと  
名は海や雨や西施う合款のふ  
栗の木の陰をたのここせをたうよ  
伴あまを可仲とす

世の人の見ぬ夜や軒の二葉  
春白とすりたれ或陽のたをせ  
まは様と候ふのしこりうらまを

様よるをたむを二木とて目あり  
紫陽のふやうをたを庭のふや  
あらしのやや帷子の時はたは

後梯を  
世のふよむうとあつたの方  
森川許六候ふ二句

推のふよるるも何れも中  
うき人の旅もよりし中

山中返道

蚤虱馬の尿つては

このわらうひひわらう  
夏のしこや

かいつとるを角ふつりけは  
あふらうとて

あまの後の旅のひと  
まのひの

あまのひの  
そのあまを

船田の  
あまの

あまの  
あまの

奥羽白川



関守は名をさみ鶴よとありの事  
大洋湖伝言

らの名をさみ鶴よとありぬ廊を  
あか川ともいふ伝言とある  
してたゞら田代の家よあり

ふ鶴鳴や人の心をや体は海を  
鶴飼とやわの足は入る養育  
ていさすひやあや

やしたるひ長良の川の船橋  
橋舟の通るさる後つ保らとそ  
やうらうらとやうてやうて鶴鳴

雨あらしやうらうらとやうて  
はらうらうらとやうて鶴鳴の  
て田の畔よのらうらうてやう  
あひひとさうあひひとさう

田一牧うらうらとやうて  
奥羽今今の白川よある二句

早苗もも柳もくろくさりぬの形  
西うらうらとやうて早苗もも風もも

等と鶴とやうての白川の畔  
越つらやと聞あや

風流のうらうらとやうて  
あひひとさうあひひとさう

早苗もも柳もくろくさりぬの形  
茶つらうらうらとやうて田柳傳  
尾流のふささかたあや

せうせうとやうてあひひとさう  
羽つらうらうらとやうて鶴鳴  
あひひとさうあひひとさう



真田隊中成る

首を切つて、またまたたつて、やがてのけ

竹砕日

浮きとも竹、穂の日に、葉をくさして

明石夜泊

梢をきや、くさくさを、夜をきき、夏の日

目を見て、も物を、くさくさを、夜をきき、夏の日

夏の日、くさくさを、夜をきき、夏の日

曲中亭

夏の夜、くさくさを、夜をきき、夏の日

宿をきき、くさくさを、夜をきき、夏の日

宿をきき

権達も、くさくさを、夜をきき、夏の日

をきき

去つたは、やがて、くさくさを、夜をきき、夏の日

無常迅速

石をきき、くさくさを、夜をきき、夏の日

人は、所を、くさくさを、夜をきき、夏の日

笑や、秋を、くさくさを、夜をきき、夏の日

盤齋、くさくさを、夜をきき、夏の日

扇も、くさくさを、夜をきき、夏の日

休、くさくさを、夜をきき、夏の日

命、くさくさを、夜をきき、夏の日

風、くさくさを、夜をきき、夏の日

破、くさくさを、夜をきき、夏の日

長、くさくさを、夜をきき、夏の日

長門の楼

あ、くさくさを、夜をきき、夏の日

尾花澤は、風亭



さしこゝろやふゆのさるるのさるる  
涼しはとておのれよのさるる  
あつこゝろのさるるのさるる  
はあしや鶴のさるるのさるる  
花のさるるのさるるのさるる  
雪のさるるのさるるのさるる  
夕まゝや傷よとてしほの死  
小瀬のさるるのさるるのさるる  
四季川原納涼  
川風やさるるのさるるのさるる  
田舎  
飯あつて燥うとてしほの死  
川中は根木よとてしほの死  
雪のさるるのさるるのさるる  
さしこゝろのさるるのさるる

雪さるるのさるるのさるる  
涼しはとておのれよのさるる  
あつこゝろのさるるのさるる  
はあしや鶴のさるるのさるる  
花のさるるのさるるのさるる  
雪のさるるのさるるのさるる  
夕まゝや傷よとてしほの死  
小瀬のさるるのさるるのさるる  
四季川原納涼  
川風やさるるのさるるのさるる  
田舎  
飯あつて燥うとてしほの死  
川中は根木よとてしほの死  
雪のさるるのさるるのさるる  
さしこゝろのさるるのさるる



蓮の香は目とめよと云ふや西のうら  
又白は赤く赤の紅紫は花端と云  
又白や赤と赤出に雲の元  
夕うはよ千鶴むしてあそひり架  
るうはに赤梅と云ふあそひり架  
鼓子花のみくあそひり架  
子休むと云ふはあそひり架  
李中もとくみれと云ふ  
豆粒はひらあそひり架  
河原に波をたぐさ長靴の元の  
花を生きて下よ花の長靴を  
と生きたる市と後田よりけち  
ゆきの花帯のあそひり架  
備前とのねの下流と  
と流や才けりあそひり架 畑

柳と葉田のやうく人輪のやう  
花と雲と一度は元のあそひり架  
夕も柳もつる元の花  
柳も折しつる元の花  
之道と對して

花はぬれつるよつるよ葉元  
元の皮はつるよ蓮を  
正成像鐵肝石心此人之情

村よのり田や柳のあそひ  
存てあそひ柳もあそひり架  
藤のあそひ柳もあそひり架  
を柳もあそひり架

坂阜山

柳もあそひり架



那須の湯の事の中 相傳の傳を  
後しとて西の一方はねれり  
湯は清く香もぬれぬ 岩は  
むらやうとて草むらとて泉は  
吾は閑心とて静かに

窓形ふとて梅は書やたし  
千子うらやうとてあてき本は海  
たふ衆人の少性も今や  
修験者の寺とて行者をたねに

夏つやと秋をねいそと南  
秋雅ま人の佳景よ對に

よなむとてとてや夏は  
わが

鳥のよとてとてや夏は  
新天具の亭とて

あの奥氷室存ぬる柳  
あつとて日と海ふ入るうら  
あや月とてゆく夜とて暑  
あや月とて朝とてあけの  
六月や夜とてたてありと  
不卜亡母追善

あや月とて踊るとて足  
なほとてとて上は鏡の  
世の友やとてとてわ  
林らとてとてとて



秋之部

初秋やほもさるるのひとみと  
しつ 秋やたみりめしお瀬のあそ  
文目やさ目よつこのあよめ無  
あゝあやけはほほくさの川  
合勢の本お葉さくさくさの秋

まき堂のぬき余りさの秋方さるま  
ちとちとさるるはる葉は七枝をさるる

七條のそ秋おひもさやほーの杖  
又月さるのあ風をさるみら白は  
厚のの厚をさるさるさるさる  
涼ーさ葉花を折さるさるさるさる  
さるさるさるさるさるさるさる

さるさるさるさるさるさるさる  
さるさるさるさるさるさるさる  
さるさるさるさるさるさるさる



加賀のついでに

徳政の申すやふつに魂やうら

本町原草子真一初五

魂やうらふも焼湯のうらふ

尾壽寺貞一

おらうらふもやうらふ

蓮池や折しつてその魂や

有徳寺の陽をてる金

家をはたけよふ髪の墓より

盆をくく月圓くくく

長ははははははははははは

白髪おめ

太田のひらひら

しんやれ甲の下のきり

序よめく野よらや蟋蟀

結露やとら

答はるるおはた

胡蝶もたうく

寄本山下

格美をくくく

あのかさ

お智蔵の

いふつ

格美やあはれ

楯つや園お

本間

鼓をかほ

まの髪ふ

たうら



あしやいかの習體と枕と  
しつてあしやうつくとわりし  
さうもにけまふささめたるし  
ものありし

新妻や教のころりつきたちの徳

二月の浦より

祝うとひろぬやうほ年ふのま

せうしつのはあつた

芥とくしつらるるは愛世しつた

西賢

雲りお茶鞋もつこもわの徳

曹良はふのあつた

りようやと白けと入るんはあつた

茶の巻

道細しつたあつたあつたあつた

園教の日にあつたあつたあつた

音しくれ不二とてあつたあつた

牛部をふ教の教くつたあつたあつた

のやとあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

杜海しつたあつたあつたあつた

全昌寺はあつたあつたあつた

堂つとあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

庭掃とあつたあつたあつたあつた

和角夢登句

南麻寺はあつたあつたあつたあつた

凡ふせもあつたあつたあつたあつた

ともあつたあつたあつたあつたあつた



よひく控て弁行の罪をまぬれ  
たるを幸よしとをまわし

僧船魚の死か之ははゆのね

嵐をきく画く一筆をききしを

ゆるるを中におききとをきき

旅にちりりたる人一廊舟まき

てこを画をかきしけり

潮白を酒もまきぬきあつた那

凶閑の況ある

葦やとをきき強みろは門の伝

ゆるるはやまよと我をたふし

ゆるるはまよとわたりぬのまき

新多や一はきき屋せいのた

花門あてをききしとをきき

とをきき女の影に二人をきき

なる男の影もまきつとをきき

秋ののよ新溜とよをきき

はききしとをききしとをきき

まきつとをききしとをきき

一家は花女もまきつとをきき

まきつとをききしとをきき

志ありしとをききしとをきき

新水亭と雨中の

ゆるるはまよとわたりぬのまき

画賢

白やあまのほきぬをききしとをきき

藤堂ま虎子の屋のまきしとをきき

ゆきやまよとわたりぬのまき

信のまきしとをききしとをきき

まきつとをききしとをきき



保内巻

とせけりて鹽の雨を交わすれ  
おききき一度一といふてをゆり

西賢

鶴のやその多よとをなをぬ  
ひりゆいと行流けややる妻  
玉川おあよおほふとをい

こよこいひる女あつたよなる  
をよこいひる女あつたよなる

蘭の香や蝶のつとばを草のみに

あつ寺

門の入りて後流は蘭のつとば  
中野原の香はよあつて殿の

つとば

あつ寺のつとばや練草の唐の

ちとつとばの香はよあつて殿の  
つとばや練草の唐の

眼前

道の名の木橋を馬十津とて  
花の橋解ちて魚のつとば

高田野原

葉のつとばのつとばのつとば  
葉のつとばのつとばのつとば

いづれまけ後め殿と相様と  
らる月やおほの夕月つとば  
何事のつとばのつとばのつとば

高田野原

つとばのつとばのつとばのつとば



あつしりやうはるのこころをよめる月  
徒してほめ月徒してほめるをよめる月  
杜牧も早行の跡は夕暮の月  
らよらよとて思ひをよめる月

馬もあつて夜は月もあつて  
月もあつて夜は月もあつて  
ゆそのやせをよめる月

月もあつて夜は月もあつて  
孟拈出たる都の人  
月もあつて夜は月もあつて

あつしりやうはるのこころをよめる月  
更料の宿をよめる月  
あつしりやうはるのこころをよめる月  
あつしりやうはるのこころをよめる月

あつしりやうはるのこころをよめる月  
あつしりやうはるのこころをよめる月  
あつしりやうはるのこころをよめる月  
あつしりやうはるのこころをよめる月

あつしりやうはるのこころをよめる月  
あつしりやうはるのこころをよめる月  
あつしりやうはるのこころをよめる月  
あつしりやうはるのこころをよめる月

あつしりやうはるのこころをよめる月  
あつしりやうはるのこころをよめる月  
あつしりやうはるのこころをよめる月  
あつしりやうはるのこころをよめる月



二舟の人... 月は... 後...  
二舟の人... 月は... 後...  
二舟の人... 月は... 後...

月... 正... 日... 後...  
月... 正... 日... 後...  
月... 正... 日... 後...

月... 東... 川...  
月... 東... 川...  
月... 東... 川...



入月のあそび札の四陽のり

日月の思をこころしりて

自らしや梳さるは兒の供

つらや新しき片も月日

月をせよあはれを

或は昔の春時に

去欲せよとある

日月お出らや五十一箇條

名目や他をめぐらしたる

根の寺の隠し

深者とも

寺のあそびの

雲形

雲形

佛の徳を

あはれ細さの徳と

あはれ細さの徳と

古寺祝日

名目やまよ

名目や兒を

名目や御の

名目や御の

名目や

名目や

名目や

名目や

名目や



今宵雅志の月も十六日  
市代休を中にもやうりの月  
十三夜もまじく史料の都の  
やまのしを安をいさよの月

望月

かこひや海老煮はほしの音  
十の夜をわつらふはあやめ  
言を丹言小詣りて

二十日月なりしこの夜を抱  
羊の禁や月宿の居下り相

宵の夜は禁ふはあやめ  
羊はふ女ありあつた奇人  
作禁行といふ夜をい

雲得よともくもあつた  
初足力金足徳の彩毫を聖守

唐来や汗流の夜乃ちち  
鶏ひや雁の来る時程あり

高松の牛心草のあり  
棧や命をわく世をわ

花女画賛

花女画の目  
寄両はつとをまはる天を  
けりあつたふらぬはは  
林は棠西風のはり  
鬼灯を真もはるも

まねて行くははのせよ  
花のしを花のしを



少枝をまゝもつて別よをこて  
りはまゝの扇門はくをばつる  
桐の本よ鶴鳴きつる涙のしら  
存の目乃今やまゝおとらつる

空田とて

宿の流のおきよはつて旅はれ  
福とてはくまのち知や近しこる  
老のあ乃あつてもつる結早雀  
刈跡や子福くつるは暗れ  
後の実ちつる様をばおまや  
目よあつてもつるはわらつる  
ひしつるまをまゝおこれ  
枝や先やりひ出た物しつる  
高田の徳をこつる  
再びには花や信は下しつる

稽もこまゝおつる  
おつるはつるはつる  
おつるはつるはつる

雪らつるはつるはつる  
富士川を通つるはつる

花とてはつるはつる  
おつるはつるはつる  
おつるはつるはつる

おつるはつるはつる  
おつるはつるはつる  
おつるはつるはつる

おつるはつるはつる  
おつるはつるはつる



あつしと日つしとあつしと木の丸

那石寺の音するをきくしとさき  
袖まゝの風をきくは花の代あり

石の丸よりあつしと木の丸

枕天の丸をきく

柳の木の丸の葉をきくしと木の丸

木の丸や伊勢の丸をきくしと木の丸

座の丸路の丸をきくしと木の丸

ものゝしと木の丸をきくしと木の丸

ききしと木の丸をきくしと木の丸

西京の丸をきくしと木の丸

山風をきく

木の丸よりあつしと木の丸  
入麩の丸をきくしと木の丸

旅窓長夜

九度起ても月をきくしと木の丸

車庸亭

木の丸よりあつしと木の丸

木の丸よりあつしと木の丸

木の丸よりあつしと木の丸

木の丸よりあつしと木の丸

木の丸よりあつしと木の丸

木の丸よりあつしと木の丸

木の丸よりあつしと木の丸

木の丸よりあつしと木の丸

木の丸よりあつしと木の丸

木の丸よりあつしと木の丸

木の丸よりあつしと木の丸



新嘉坡の年終りともあつたしんじゆ  
きんじゆのりしんじゆのりしんじゆ  
山中温泉

いんじゆのりしんじゆのりしんじゆ  
本園亭

かきとあや月しんじゆのりしんじゆ  
九月九日て舟うつれを推本たれま

あまのりしんじゆのりしんじゆ  
田家

稲たのりしんじゆのりしんじゆ  
大門通

長うあやしんじゆのりしんじゆ  
あまのりしんじゆのりしんじゆ

あまのりしんじゆのりしんじゆ  
あまのりしんじゆのりしんじゆ

あまのりしんじゆのりしんじゆ  
あまのりしんじゆのりしんじゆ

あまのりしんじゆのりしんじゆ  
あまのりしんじゆのりしんじゆ

あまのりしんじゆのりしんじゆ  
あまのりしんじゆのりしんじゆ

あまのりしんじゆのりしんじゆ  
あまのりしんじゆのりしんじゆ

あまのりしんじゆのりしんじゆ  
あまのりしんじゆのりしんじゆ

あまのりしんじゆのりしんじゆ  
あまのりしんじゆのりしんじゆ

あまのりしんじゆのりしんじゆ  
あまのりしんじゆのりしんじゆ

あまのりしんじゆのりしんじゆ  
あまのりしんじゆのりしんじゆ



菊は出でて大なる花と詠波は宵月夜  
因女らやあまを

志くは園は月よきとてさる塵もなし  
後醍醐帝の御後さねを

御之廟の御後さねの志のふゆを君の子  
本為の縁うき世の人のみやけのまよ

如心あり別聖

はたはつて木の葉もあはれ実存もや  
杖丸の吹ともまきし粟の穂

可休まらむと

和文と親その子けは庭や柿ころん

こまおあまを

甲ゆつて柿の葉もころあまを

恨柿や一口きくらむ穂のつと

菊は出でて大なる花と詠波は宵月夜

草花やあまをさるるの文と

ね草やこころさるるの文と

この草やこころねね木の葉

ね草やあまをね木の葉の文と

任替の汁はのめをさるる

若者あまをさるるもあまを

餅杖の目、史料の星はたか

あまをさるるの目と

あまをさるるの目と

あまをさるるの目と

あまをさるるの目と

あまをさるるの目と

あまをさるるの目と

あまをさるるの目と



宮殿に侍りて

さきつらよとれやあひぬ門邊宮  
とのち代家らうらぶ出づぬのち髪ね  
よ備ふまよみつとよ言はく眉と  
や老らうしとくしとくしとくし

さよこらつは入園とあつと枯のち  
枯れや柳よこころさきさきとけり  
又りこせと脚も時安とこ所はは麻の枝  
枯れとせあつとこはたさきとけり

西別

さよこらつは入園とあつと枯のち  
枯れや柳よこころさきさきとけり

さよこらつは入園とあつと枯のち  
枯れや柳よこころさきさきとけり

わなも保相笑具り

枯れや柳よこころさきさきとけり

福徳

枯れや柳よこころさきさきとけり  
枯れや柳よこころさきさきとけり

憶老杜

風を吹てさき枯れよこころさき  
武蔵野を吹てさき枯れよこころさき

心もあひして福はらうとくし

死もせぬ旅中枯れよこころさき  
枯れよこころさき枯れよこころさき

葉門雲舟の備あつとくし  
枯れよこころさき枯れよこころさき

所思

枯れや柳よこころさきさきとけり  
人形やあつとくし枯れよこころさき



法興寺の紅葉は好し

木風の軒をめぐると木ぬき  
り木や月よりやうとて赤葉園

長月六日はかきとて近言おんこ

踏のふみよりいりり木ぬき  
り木ぬきたのりやまき密相  
り木やりのたもりけたる赤葉の緑

冬之部

相葉のぬきとるはー候はけと

ぬきとるはけとせーかきと

此はよ草鞋を踏つてかきと

草ぬきとるはけとせーかきと

かきとるはけとせーかきと

藤人との名はけとせーかきと

一尾根をきくくく雪う富士のちを

と体（井）のたかきけとせーかきと

ゆきとるはけとせーかきと

ゆきとるはけとせーかきと

草のたか

人しとるはけとせーかきと

ゆきとるはけとせーかきと

ゆきとるはけとせーかきと



宿うして名をたうの禮する禮礼式  
馬うして名をたう一財雨のた井川  
くわうと人をもとくはた雨  
新葉其出さるる早しうくは  
くはた井短外くもくは  
能く未の庭をたうくは  
人の名をくはくは

ゆくはたのまをくはくは  
くはた雨もくはくは  
金屏のにはたさるるおは  
勝酒堂湖の御をくはくは  
くはた雨もくはくは  
くはた雨もくはくは

新波はや田圃のくはくは  
くはた雨もくはくは  
くはた雨もくはくは

千川亭

折くは伊吹をくはくは  
くはた雨もくはくは  
くはた雨もくはくは  
くはた雨もくはくは  
くはた雨もくはくは

支梁亭口切の日

口切は塙の庭をくはくは  
くはた雨もくはくは  
くはた雨もくはくは



本かきしし 龍身、竹、林、日、能、た、る、来

竹画賛

おかりしや竹はかくして志すらぬ  
風や類を結ばざるむし人の顔

冬竹園本寺

本殺<sup>カラ</sup>竹<sup>シ</sup>日岩吹とくる 松竹のま

同新緑蒼石園竹園の句

あまあふよこけは木くくくや冬住若  
あまあは権院をささるる

雪ふよこの名をさくくせと海をさく

之天の竹もゆきゆきの木のまゆりのまゆ

冬園の無雪のあまあはゆきゆきゆき

たけの竹の句

百年の景色を庭のそとにまゆり来  
まゆりくるる園や竹あてまゆりくる

道系在来の竹の名はまゆりくるまゆりに

まゆりくるる竹はまゆりくるるまゆりに

まゆりくるる竹はまゆりくるるまゆりに

まゆりくるる竹はまゆりくるるまゆりに

まゆりくるる竹はまゆりくるるまゆりに

まゆりくるる竹はまゆりくるるまゆりに

まゆりくるる竹はまゆりくるるまゆりに

まゆりくるる竹はまゆりくるるまゆりに

まゆりくるる竹はまゆりくるるまゆりに

まゆりくるる竹はまゆりくるるまゆりに

まゆりくるる竹はまゆりくるるまゆりに

まゆりくるる竹はまゆりくるるまゆりに

十月の竹園の句

まゆりくるる竹はまゆりくるるまゆりに



外記や相よ海よをぬえはの若人  
若法師科雪別堂

本う〜〜は白ひやつけ〜降りよふ  
きり菊や粉糖の〜は白の〜  
熱田梅人亭塵裏の園をちのひよ

せ〜

名仙や白ひ薄子乃ともうつを  
〜の白雪とらありはまよふ  
柳先柳後と名を内あ〜

そのよほひ柳よりあろ〜名仙ふ  
菊の後大根の印〜は〜  
鞠堂ふ少降ひふや大根ひ

玄庵子旅者よ〜葉宿を喫〜  
女士の大根より葉とあ〜  
あうれの後ふ今朝〜ことさう

防川亭

香紙揮る梅よ〜新徳りる  
梅枝早咲つるむ保負入り  
あよりて是入さ〜りかひ  
芥穂やさ〜梅の田井の〜水  
杜園うろを尋ぬ〜

麦と〜〜隠るや〜白田む〜  
され〜〜あ〜は霜の若  
食ふのふ金おの字なり〜

二病中

菊の葉は地も〜せらる〜  
深川大橋成能せ〜時

〜や〜は踏信のあ  
〜〜は〜  
あ〜のあ  
あ〜のあ



とつちもや 幸存のまうらあは  
いふもいふもいふもいふも

とつちもや 虎の皮お好つとつち  
南無と

ゆもや 此の文件へのねあつと  
藤村

とつちもや 此の文件へのねあつと  
ゆもや 此の文件へのねあつと  
おまへに言へば 是の天のまこととつち  
おまへはあつと

市人よ 此のまこととつち  
藤村と

馬をさかちつとつち  
箱根ちびんもあつとつち  
中あまのまこととつち

伝

雪とつち 今宵のまこととつち

深川のまこととつち

米買にもつちの代名や 投取中

對友人書良

君火はけとつちのつとせんとつち

関右の歳

酒のまこととつち 梅のつとせんとつち

湯のまこととつち 梅のつとせんとつち  
おまへに言へば 是の天のまこととつち  
おまへはあつと

熱田の宮に 此の文件へのねあつと

磨きつとつち 此の文件へのねあつと  
とつちのまこととつち



神人なむ。

二人見し一雪のまじりて〇も降るを  
きこゆるや梅屋の昔の別れに  
いさよはれの雪のまじりて〇も降るを  
をのらむは誰人ともし世よとて  
せしきこも老のほろろは思ふか  
くもはしとあり今大は春の  
雪月之の老危のまじりて〇も降るを  
かこもはしとあり今大は春の  
かぬの尾のまじりて〇も降るを

湖の脚を

は雪のまじりて〇も降るを  
つ〇も降るを

か町画賛

雪のまじりて〇も降るを

雪のまじりて〇も降るを

牛の賛

寒山賛  
庭掃て雪をわきとる  
雪のまじりて〇も降るを

自画自賛

雪のまじりて〇も降るを

雪のまじりて〇も降るを

雪のまじりて〇も降るを

雪のまじりて〇も降るを

雪のまじりて〇も降るを

雪のまじりて〇も降るを

雪のまじりて〇も降るを

雪のまじりて〇も降るを

雪のまじりて〇も降るを



茅舎買水

氷苦く偃嵐う咽とくはせんと  
とくみり馬とよ氷の乾は伸  
籠彼くあは氷の中枯之の形  
松葉ゴを巻くてこみ裁あつるまはけり  
越人と吉田の驛とく

空ねとて人 福寿をそのり  
仙化う父の追号

袖のちよよとけく定し濃極つと  
信細の新も定し一息の店  
葱若ろく洗ひたてたるをけり  
まよきしと帆柱さあき入にけり  
風葉もよまはれしと

あはるまのつりま生したる孫書が  
まよきしとけりまはれしと

任つらぬ旅のあろや 又巨燧

物と世をふのひと

一衆の後あまさけは火桶のぬ  
か年をくしとく人よ

煙ちもまき田や圃の煮るあし

曲家 諸教とく

うつこ方や望よはつ考の乾は伸

そ路丸の賛

おけたあちやま ぬらぬの丸印  
ためつけてるを又よゆる命を  
はせると鴨のあつほのりに若ろ  
毛衣よつみとぬく 鴨の足

存続の流はこれにまきし雪の厚

星降の園を又よまやあつとく

園のあちまを又よまやあつとく



冬杪丹ふらふいぢのちのちいふに

伊良古崎の南の海の家いふに

のしめてはるる西のちいふに

有るあこいふもあつておりの松衣

あつてあつて

有るこつとあつていふに伊良古崎

生あつていふに申すは海流のまじ

あつて何ともれまぬいふにいふにけ

穂田まき

指もあぬ純肉のひて七里まき

何れけや細くあれたいふに

七浦の塚もめくは神たつて

何豆いふに申すはいふに所敷

子申すいふに申すはいふに

子申すいふに申すはいふに

えつて餅を申す魂のいふに

えつて餅を申す魂のいふに

煤掃やくれり石のいふに

煤掃一て兒いやいふに世の煤掃

仍掃の五袋一具新飯の掃

いふに申すはいふに申すは

あつて世の煤掃を申すは

掃り

煤掃を申すは申すは申すは

あつて申すは申すは申すは

あつて申すは申すは申すは

あつて申すは申すは申すは

あつて申すは申すは申すは

あつて申すは申すは申すは



洛野靈別海皇祀九皇宮

平日多邪をばやとて己をたれ

乙科の邪をばやとて己をたれ

人の家かして我をこゝにたれ

鳥もみあつるをたれこゝにたれ

せつうれてこゝにたれこゝにたれ

わされよよ葉飯子一掃入年のを

龍神ありこゝにたれこゝにたれ

年をぬきとれこゝにたれこゝにたれ

とてこゝにたれこゝにたれ

くまのたれ

免てたれ人の教もつこゝにたれ

月をこゝにたれこゝにたれ

ゆるや一掃の法よおへこゝにたれ

ゆる人よあつたおもあつた年のを

蛤の生る甲斐の法とてこゝにたれ  
合別の底たれこゝにたれ

雑之部

みろくし西村伝をこゝにたれ

世よこゝにたれこゝにたれ

三聖人の圖

月をたれねやまあとのあつた

来名より馬は畜て杖突板りて

たれにたれ靴こりりて馬よりたれ

歩りたれこゝにたれ杖つた馬より

かゝるたれ湯をよゆる以袂のよ

酒のこ君人のたれ

目よまなこ酒のこゝにたれ

神はたれ



海より二両や 蘇りてくまの君  
布袋の賛  
お月や 袋の中は月と云ふ

芭蕉翁發句集大尾



昔在纓於漚向漚  
流 叢 畔 若 亦 亦  
以 月 秋 亦 亦 亦  
碑 亦 亦 亦 亦 亦  
亦 亦 亦 亦 亦  
亦 亦 亦 亦 亦



吊木村重成墓

頼山陽

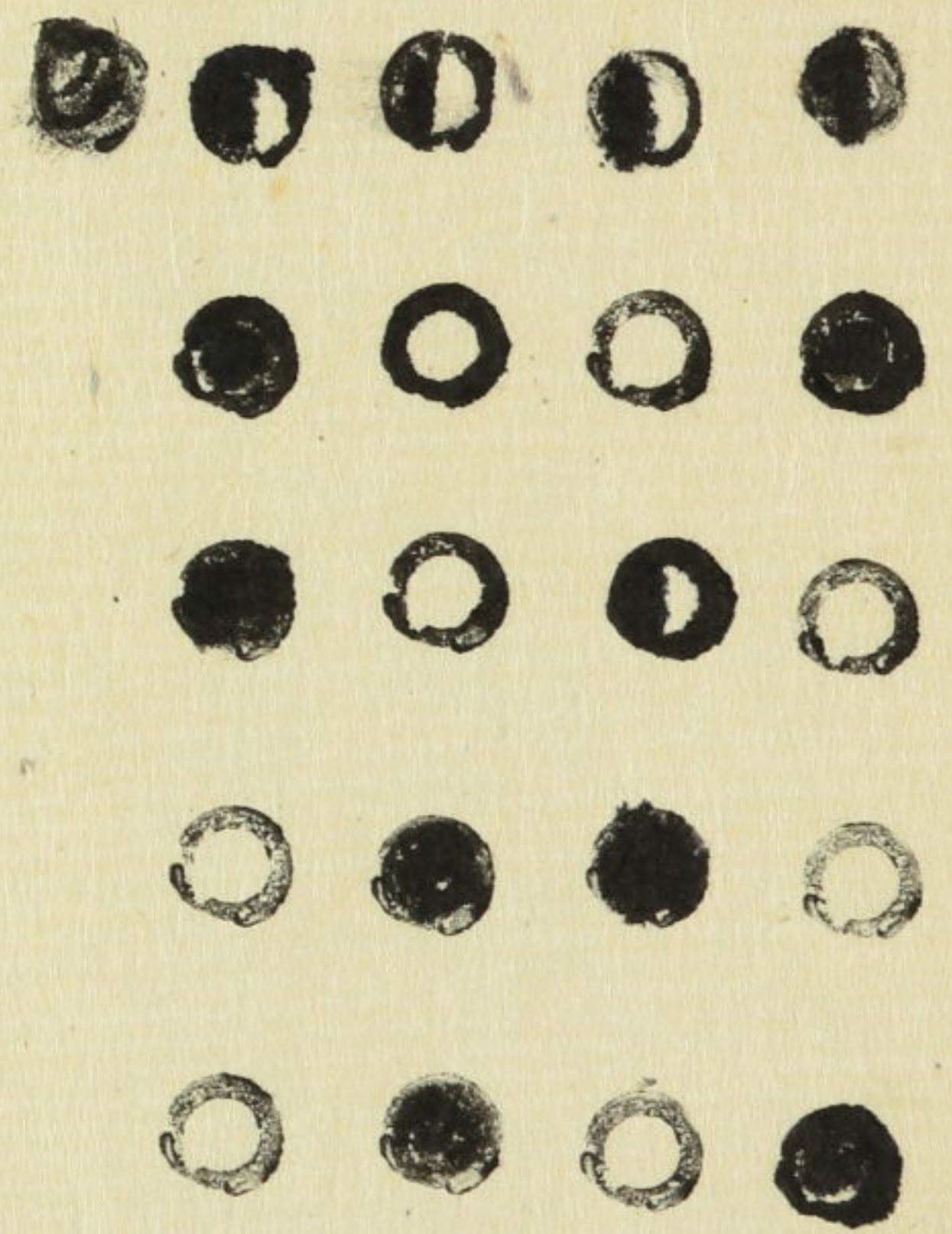
来吊元和丹戰場。風吹禾  
黍冷。秋陽孤憤一尺名。千  
古骨朽猶聞蘭麝香。

頼三木三郎

排雲欲手拂妖災。失脚来  
隨江戶城。井底癡蛙過憂  
天邊大月關。光明身隨湯慮

鏗家無信。夢涉鯨濤。劔  
有声風雨。多者斗苔石。面  
誰題日本故狂生。







羽前田村七郎  
山形縣管轄

中野門松村

進藤添治郎

寫之

維新明治五年

五月吉日繕之